

浪江の

こころ通信

・第4号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信/第4号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒976-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4261





私は、震災3日後に親戚のおじさんが住んでいるさいたま市に避難してきました。お父さんは福島で働いていて月に1回から2回会いに来てくれます。昨日は私の誕生日だったのでお父さんも一緒にみんなでケーキを食べました。



▲お気に入りのマグカップを前に並べて。左から花菜ちゃん、舞ちゃん、羽海ちゃん

羽海ちゃんは現在、親戚の叔父さんが住んでいるさいたま市に妹の舞ちゃん(小2)と花菜ちゃん(小1)祖父母、お母さんと暮らしています。お父さんは福島で働いているため離ればなれの生活です。

今は毎朝、通学班のみんなと一緒に学校へ通っています。新しい友達もできました。学校で一番楽しいのは、友だちと話したり遊んだりしているときです。休み時間になるとみんなが遊びに誘ってくれるのがうれい



埼玉県

渡部

羽海ちゃん(小4)(立野)

取材者：ちば市民活動・市民事業サポート
クラブ 大内・牧野
取材日：9月11日

浪江・沢上の花火を見たい
なみえ焼そばが食べたい



福島県

根本 昌幸さん(苧宿)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：9月4日

孫の成長に、生きがいと希望を託して

JR富岡駅前の勤務先で地震に遭い、直後の津波から逃れながら、何とか苧宿の自宅にたどり着く。すぐに母親や妻、孫、そして愛犬とともに津島へ避難。3日後、福島市へ移動し、到着直後は友人宅に。その後、義理の弟さん宅で3月半ばからの3カ月弱を過ごし、6月初旬に相馬市の借上住宅に転居。



▲おばあちゃんと根本さんご夫妻、そして愛犬ココ、みんな一緒に。

■ともかく、家族全員が無事に帰宅し、避難したあの日強い揺れの後、職場から水平線を見つめていると、10mを超すと思われる真っ黒い波の壁が見えました。とつさに大津波の危険を確信し、近くの人に避難を呼びかけました。通称「山麓線」をたどって自宅へ戻ろうとしましたが、橋のたもとには大きな亀裂や隆起ができていて、周りの人たちと丸太を組み、助け合いながら家に戻りました。自宅にいた今年93歳になる母は歩くことが不自由でしたが、

■仲間や同窓生、さまざまな人たちに支えられて私も妻も詩人としての活動が長く、作詞活動を通じた音楽関係の先輩後輩や、作り上げた歌を届けた施設の方々から、本当に多くのお心遣いや差し入れをいただきました。また、妻の出身地福島市の友人たちが消息を心配してくれたり、かつての部活の仲間たちが励ます会を開いてくれたりと、多くの人に支え

あの非常時だからだったのでしょうが、迅速に200m離れた隣家を頼り、無事でした。また、町の体育館に向いていた妻、洋子は、途中にある浪江高校の生徒たちに請戸地区の津波を知らせたり、避難を呼びかけたりしながら家に向かったようです。苧野小学校に通学していた孫の郁弥も無事に帰宅し、愛犬を伴って全員で津島の避難所に行きました。

原発事故の深刻さを知らされるたびに、浪江へ戻ることは無理なかもしれないと思ってしまいましたが、浪江町の人々が活躍されている新聞記事などを目にする、とてもうれしいです。避難するたびに転校することになった孫はかわいそうでしたが、今は元気に野球を頑張っています。

これから、私が作詞した「ふるさと浪江」のレコーディングをしますが、私の中ではいつまでも美しい浪江のままです。歌のイメージを壊したくないので、まだ無残な浪江は見たくありませんが、一段落したら墓参りをしに一時帰宅したいと思っています。



役場から

金山 信一さん(立野)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
宮城大学地域連携センター 高田
取材日：9月14日



▲仕事帰りに福島駅前にて

浪江の人・海・山・川を想って…

現在は、二本松市にある浪江町役場で総務の仕事を担当。住まいは、本宮市で家族とともに暮らす。活発だった小中高校の横のつながりの会合を「これからもできれば…」と懐かしむ。浪江の自然を愛するアウトドア大好き人間。

今、浪江で思い出すのは、家族や子どもたちと出かけた川や海のことです。季節ごとに我が家の楽しみのサイクルができていて、4月はヤマメ釣り、7月はアユ釣り。また、海釣りでは夏にアジやイシモチを釣ったものです。

私の家族は震災後、何カ所か避難所を回った後、妻と子どもたちは静岡県に、母と祖母は神奈川県に、祖父は猪苗代町に分散避難し、私は役場の仕事があるので一人でした。連絡もままならない場合があり苦労しました。でも今は、やっと家族が2カ所に分かれながらも近い場所で暮らせるようになりホッとしています。

震災の後には、非常用電源を確保したり、避難物資を運んだり、炊き出しのための食糧の確保のために会社や商店、農家をお願いに出かけたり、避難所で食事を配る担当をしたり、役場の移転や出張所立ち上げの担当になり必死でした。でも「うちら職員がやらねば誰がやる。」という気持ちで、一生懸命に動く仲間たちに支えられてきました。

今後、浪江に帰ったら、自然を感じて楽しむ生活をまた送りたいですね。また、家族に任せきりだった田畑もなるべく頑張りたいと思います。



郡 崇斗くん(小4)(北幾世橋)

取材者：特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 佐藤
取材日：9月10日

原発はばく発したけど、 ぼくのこころはばく発しないぞ！

浪江町では幾世橋に住んでいて、今は福島市上鳥渡しのぶ台の仮設住宅に住んでいます。幾世橋小学校のみんなに会いたいな。あそびたいな。そして、桑原先生にまた怒られてみたいな。

9月12日、アメリカでテロのあった翌日、ぼくの誕生日です。



▲崇斗くん(中央)を囲んで、
祖父母、父母、弟、愛犬イチ

震災後は、小高工業高校、相馬市、宮城県角田市、埼玉県、あだたら体育館、土湯温泉と移って、ちょっと前に福島市上鳥渡しのぶ台の仮設住宅に引っ越してきました。すぐ南前の仮設住宅に、おじいちゃんおばあちゃんが住んでいて、犬のイチも、みんないっしょです。

学校は、荒井小学校に通っています。幾世橋小学校のときの近くの子も何人かいるのが、うれしいです。友だちもできました。9月18日が運動会です。楽しみです。

浪江町であった、初発神社の盆踊りのことやふれあいまつりでのもちつき、雑煮もちのこと、みんなでザリガニ取りをしたこと、3年生のときにビーズのストラップを作ったことなどを思い出します。

幾世橋小学校で大の仲よしだった原田勇真くん(浪江のこころ通信第2号に登場)が、避難先の桑折町立醸芳小学校にいたとき、ぼくが会ったこともない勇真くんのクラスの子全員から、手書きの励ましの手紙をもらいました。ぼくの宝ものです。



若勢 重孝さん(権現堂)

取材者：特定非営利活動法人
ピンスフクしま 豊田
取材日：9月12日

絆を大切に

いました。浪江町民を多く知っており、みなさんを友人以上の関係だと思っています。毎日、新聞を読んでいて、言葉にならない思いがあります。また、福島市や郡山市、他県へそれぞれ移った方と会う機会が減りました。なかなか顔を見て話すことが減った今、「絆」が一番大切なことだとあらためて気付きました。

私には娘が4人おり、17人の大家族です。先日のお盆のときには家族全員が集まりました。秋にはまた集まり、芋煮会などをしていと思っています。こうして家族の顔を見ることが幸せに感じます。

■今の生活
私は今、二本松の借上げ住宅で暮らしています。浪江で菊を長年育ててきました。少しではありますが、また1から育てています。きれいな菊が咲くことを願いながら今、前向きな思いで暮らしています。

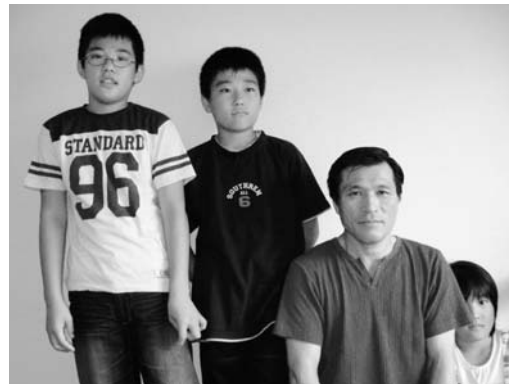
■大切に思うこと
長年、浪江で郵政に勤めて町に帰りたいです。里帰りできる日を願っています。早くふるさと浪江で皆さんにお会いできる日を心待ちにしています。



五十嵐 明さん(請戸)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポータークラブ 風間・鍋嶋
取材日：9月17日

子どもたちの育ちを大事にしたい



▲左から涼くん(小6)、
竜也くん(小5)、明さん、
美菜ちゃん(小4)

親戚を頼って東京に避難。現在は、3人の子どもたちの小学校への通学を考え、北区の都営住宅に家族5人で暮らす。

とにかく、4月から子どもたちを学校に通わせたくて、編入手続きをしたところ住民票も移すことになってしまいました。浪江からの情報が来なくなる不安もあり、浪江町役場や北区役所に確認、住民票を浪江町に戻しました。近くには知り合いもおらず、病院のこと、予防接種のことなど、子どもたちに関する手続きなど、何度も尋ねないと解決しないことが多く大変です。娘の美菜は、「東京は、建物が

いっぱい建ってるね。」と言います。涼しい海風、新鮮な魚など、浪江の暮らしが思い出されます。9月10日にスポーツ少年団の卒団式があり、家族5人で福島に帰りました。友だちとの再会がよほどうれしかったらしく、子どもたちは夜じゅう、はしゃいで少年団の方に叱られたそうです。仕事のことや長男の中学進学を考えると、東京での生活を続けるか、福島に戻るかを秋には決めなければと思います。しかし、先の見通しがつかない中、迷いがあります。今は、じっと耐え、子どもたちの将来も考えて決めていきたいと思っています。



玉井 三千子さん(権現堂)

取材者：とちぎボランティアネットワーク 君嶋・大泉
取材日：9月13日

また浪江で生活を

5年前、栃木県宇都宮市から浪江町へ移り住んだ玉井さん家族は、最初戸惑いはあったものの浪江町での生活に充実を覚えていた。

そんな中の今回の震災。またすぐに戻れると財布と愛犬を連れ出てきたが…。

現在は、宇都宮市に家族と住んでいる。

震災のあと自宅は大丈夫だったので、津波の被害にあった知人家族を自宅に泊めていた。

自宅を片付け、津波の被害にあった人もいるが、「また以前の生活に戻れるように一緒に頑張らなとね。」と話していた矢先に避難指示が出た。すぐまた戻れると思いきや、財布と愛犬を連れて出たが、戻れたのは一時帰宅のみ。自宅は荒れた状況だった。

それでもいつになるか分からないが、帰町したいと思う。戻っておいしい魚が食べたい。

こっちに来て、今までどれだけ新鮮な魚を食べたか実感した。また、離れてより一層浪江の素晴らしさを実感している。都会のような物質的な豊かさは無いかもしれないが、人の温かさや時間の流れや風土など、心の豊かさと環境の豊かさが浪江の良さだと思う。

子どもたちの友だちの中にも亡くなった方もいるが、その人の分も一生懸命に生きようと話している。また浪江の人たちと元気な姿でいつか会いたいのとも。

そして、いつになるか分からないが、豊かな浪江で以前のような暮らしがしたい。



▲玉井さんご家族



大山 恵さん(川添)

取材者：一般社団法人いなかパイプ 佐々倉
取材日：9月12日

前向きに笑顔を絶やさずに、今できることを

長女・諒子ちゃんと恵さんの故郷・高知で元気に暮らす現在ですが、郡山に暮らす親戚の近くへ暮らそうと10月に栃木県へ引っ越し、新しい生活がスタートします。

■家族全員無事だった
高台に家があったこともあり、津波は大丈夫でした。けれど、家の壁は崩れて、隣の部屋が見えているとか、食器が棚から出て全部割れて泥棒が入ったような状態。揺れない時間のほうが短いくらい余震もひどく「今日が私の命日か。」と思つたほど怖かつたです。戦後の焼け野原のように何にもない海岸沿いを車で逃げながら、千葉で単身赴任中の主人とも携帯電話がつながらない状態でしたが、必死で何度も連絡をとりました。幸いにも家族、親戚、友だちもみんな無事で「逃げ足の速いやつらばかりだな。」と後で主人と笑いました。

■なみえ焼そばが食べたくなる
高知に来てから、時折、娘が「ママ、スーパードなみえ焼そば買って来て。」と言うんです。「高知には無いから。」と答えるんですが、ときどき食べたくなります。麺がうどんくらい太くて、極太・大・中と太さも選べて、甘いソースがついていて、スーパード売っています。私が初めて食べたのは、主人の友だちが作ってくれて、ウインナー、たまねぎ、もやしが入ったもので「うわぁー焼きうどん！」って言ったら「ソバだから。」と

■何ができるか、今日できることを考えてやる
ここにきて、扇風機や自転車などいろいろな方に支援していた私、新渡へ来てまず最初にしたこと、産婦人科を探すこと。お腹の中に男の子を授かっていたので、心配でならなかったからです。内部被ばく検査も受け、結果、異常がなかったのホッとしています。
震災前、私は浪江町権現堂地域に住み、夫と冠婚葬祭の会社を営んでいました。地震発生時もお葬式の真っ最中。ものすごい揺れだったので、お葬式どころではなく、外に飛び出しました。
祖父、父母、姉、夫のおぼの子どもら10人で避難した矢吹町では、地元の人のための避難所でしたが、特例として受け入れてもらいました。そこでのガソリンの補給は、とても助かりました。食事には、温かいおにぎりが支給され、心が少し落ち着いたことを覚えています。
その後、私たちは比較的福島に言われました。浪江は、食材が豊富で魚もおいしい。そろそろ鮭の時期になります。娘も大好きで、鮭のつかみどりをさせてもらって、家に持ち帰って、庭でチャンチャン焼きをしたのを思い出します。こんなどうでもいいようなたわいも無いことが、本当に幸せなんだなとつくづく思います。

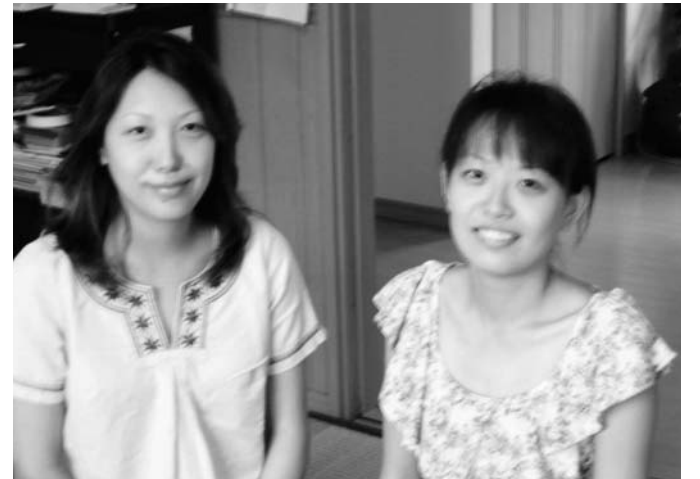
だいて、とても感謝しています。これに伝えるためにも「私たちがやるべきことをやんなきゃ。」と思つています。前向きに笑顔を絶やさず、今できることをやって頑張るしかない。「復興」がか大きなことでなくてもいい、「家族を守る。」でも何でもいい、他の方にも新しい生活を始めていってほしいと思います。特に若い人たちには頑張つてほしい。新天地で、前を見て頑張つても



朝田 麻美さん(権現堂)

取材者：くびき野NPOサポートセンター 渡辺・植木
取材日：8月25日

いつか浪江に帰る日まで



▲朝田さん(左)と姉の星野美咲さん(右)

震災時、妊娠していた朝田さんは、9月に出産予定。親戚と一緒に避難先を転々としていたが、現在、夫の英謙さんと2人で新潟のアパートに住んでいる。偶然にも、近隣には同郷の避難者も住んでいて、助け合いながら暮らしている。

夫と冠婚葬祭の会社を営んでいました。地震発生時もお葬式の真っ最中。ものすごい揺れだったので、お葬式どころではなく、外に飛び出しました。
祖父、父母、姉、夫のおぼの子どもら10人で避難した矢吹町では、地元の人のための避難所でしたが、特例として受け入れてもらいました。そこでのガソリンの補給は、とても助かりました。食事には、温かいおにぎりが支給され、心が少し落ち着いたことを覚えています。
その後、私たちは比較的福島

から近く、放射能の心配がない新潟市にある物件を見つけました。慣れない土地で不安もありましたが、役所の方の親切な対応に感激しています。
逆に、原発問題の対応が遅いことには怒りを隠せません。避難時に置いて来た物に、ブルーシートをかけてほしいと声を上げて、2カ月後、やっと話し合いをしている状態です。東京で原発についてのデモに参加したのですが、全く報道されないことも残念。復興に向けて何もできないことが大変悔しいです。
自分たちが新潟に拠点を置くかどうかは、今後の浪江の復興次第です。今は心も体もふらふらしていて幽霊のように感じます。
姉は、住民登録が東京都のまま、体調を崩し療養のために浪江に戻ってきている最中、被災しました。失業保険をもらうのに被災証明書が必要だったので、矢吹町に避難していた3月20日までの名簿を捨ててしまつたと聞いて、猛抗議。名簿を捨てるなどはあつてはならないことです。
また私たちには家族同様に大切な愛猫がいて、一緒に新潟に避難してきました。不安や怒りがこみ上げるときでも、猫の存在で少しその気持ちが紛れます。

妊婦という立場での避難生活。たいへんな時期もありましたが、今は35週目で安定し、定期的にプールの通つたり、ウォーキングをしたりと元気な赤ちゃんを産むためにがんばっています。
この通信が完成するころには、元気な赤ちゃんが誕生しているといいなあと願っています。「広報なみえ」を見て、私たちが元気だということを知ってもらえ、皆さんの様子が分かる、この機会を作ってもらえて本当に感謝しています。

私が、新潟へ来てまず最初にしたこと、産婦人科を探すこと。お腹の中に男の子を授かっていたので、心配でならなかったからです。内部被ばく検査も受け、結果、異常がなかったのホッとしています。
震災前、私は浪江町権現堂地域に住み、夫と冠婚葬祭の会社を営んでいました。地震発生時もお葬式の真っ最中。ものすごい揺れだったので、お葬式どころではなく、外に飛び出しました。
祖父、父母、姉、夫のおぼの子どもら10人で避難した矢吹町では、地元の人のための避難所でしたが、特例として受け入れてもらいました。そこでのガソリンの補給は、とても助かりました。食事には、温かいおにぎりが支給され、心が少し落ち着いたことを覚えています。
その後、私たちは比較的福島

から近く、放射能の心配がない新潟市にある物件を見つけました。慣れない土地で不安もありましたが、役所の方の親切な対応に感激しています。
逆に、原発問題の対応が遅いことには怒りを隠せません。避難時に置いて来た物に、ブルーシートをかけてほしいと声を上げて、2カ月後、やっと話し合いをしている状態です。東京で原発についてのデモに参加したのですが、全く報道されないことも残念。復興に向けて何もできないことが大変悔しいです。
自分たちが新潟に拠点を置くかどうかは、今後の浪江の復興次第です。今は心も体もふらふらしていて幽霊のように感じます。
姉は、住民登録が東京都のまま、体調を崩し療養のために浪江に戻ってきている最中、被災しました。失業保険をもらうのに被災証明書が必要だったので、矢吹町に避難していた3月20日までの名簿を捨ててしまつたと聞いて、猛抗議。名簿を捨てるなどはあつてはならないことです。
また私たちには家族同様に大切な愛猫がいて、一緒に新潟に避難してきました。不安や怒りがこみ上げるときでも、猫の存在で少しその気持ちが紛れます。

人間も生活を安定させることに必死ですが、それは動物たちも同じこと。テレビのニュース等で、被災地に置き去りにされた動物たちを見ると、心が痛みます。
私は、浪江町で生まれ育ちました。浪江町への思いは人一倍強いです。今回の地震については、本当にショックが大きいのですが、浪江とつながっていたという気持ちがあるので、住民票もしばらくは動かさずつもりはありません。今は浪江に帰れませんが、生まれてくる子どもがひとり立ちしたら、例えば放射線の問題が残っていたとしても、浪江に帰りたいと思います。私のふるさとには浪江しかないのですから。

私は、浪江町で生まれ育ちました。浪江町への思いは人一倍強いです。今回の地震については、本当にショックが大きいのですが、浪江とつながっていたという気持ちがあるので、住民票もしばらくは動かさずつもりはありません。今は浪江に帰れませんが、生まれてくる子どもがひとり立ちしたら、例えば放射線の問題が残っていたとしても、浪江に帰りたいと思います。私のふるさとには浪江しかないのですから。



▲大山 諒子ちゃん (7才)



牛来 照雄さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 松田
取材日：9月3日

借上住宅にも情報が欲しい

浪江町の川添地区に住んでいる。震災当日は、翌日に退院を予定して、南相馬市の市立総合病院に入院中だった。知り合いの車に同乗して自宅に戻ってからは、二本松市を経て千葉県まで避難したが、なかなか浪江の情報が入ってこないのが、4月になって再び二本松市に戻り、その後岳温泉の旅館にお世話になっていた。6月下旬から、三男家族も避難している桑折町に夫婦で暮らしている。



▲照雄さんと奥さんの絃子さん

入院していた病院から、津波が迫ってくる様子が見えたので、これは尋常ではないと感じた。病院の廊下や外にもベッドが並べられ、さながら野戦病院のようだった。被災の後、妻とは別々に避難のための移動をしなければならなかったが、津島の避難所で再会できたことは幸いだった。それでも、避難所での寒さや食べ物の少なさ、状況が分からないことに対する精神的な苦痛など、今思い出してもつらいことが多い。県内のあちこちに住んでいる知人や友人が、いろいろと気に掛けて支援してくれたことは、物心両面で助けられた。いろんな縁があって桑折町にお世話になることになったが、この家も知人が探してくれたものなので、本当にありがたい。

ここ桑折町は、浪江町に住んでいるとあまり馴染みがないが、ほとんどの用事が歩いて済ませることができるほどコンパクトで便利なところだ。かつて通勤で近くに住んでいたことがあり、果物もおいしく暮らしやすい町なので、大変気に入っている。

そして、浪江でやっていたグランドゴルフを桑折町でも仲間に入れてもらってやれることがうれしい。できれば、そば打ちやパソコンなどもやってみたいと思っている。

最後に、役場へのお願いだが、避難者がまとまって住んでいる仮設住宅には、全国からの支援に関するお知らせなど多くの情報が入ってくるようだが、個別に住んでいる借上住宅にはそうした情報がなかなか入ってこないで、ぜひ情報の伝達について検討して欲しい。



木村 郁也さん(中2)(権現堂)

取材者：特定非営利活動法人ピースふくしま 豊田
取材日：9月14日

走り続けたい



▲「またいつか、浪江で元気に遊びましょ!!」と浪江の友達に伝えたいです。

■今の生活
ぼくは今、二本松市の東和にある仮設住宅で祖母と父、母と兄、妹の6人で暮らしています。ここから東和中学校に通っています。バスの時間があるため、朝早くに登校し夜遅くに帰宅するので、少し大変なところがあります。最初は転校することで、不安な気持ちがありました。けれどクラスメイトはとても優しく、担任の先生は面白いので徐々に馴染むことができました。今はクラスの中で打ち解けて、新しい友だちができてうれしいです。ぼくは、浪江にいたころから陸上をしていて、走ることが大好きです。走っているときが一番楽しいです。地震の後、ぼくの家族は岳温泉に4月から8月初旬まで避難して

■不安に思うこと
この仮設住宅は家族で暮らすには狭いことが不便です。でも、ここに来てから1カ月以上たちましたので、だいぶ慣れてきました。また、まわりには同世代の人が少なく、同じ学校の人が1人しかいないので、遊ぶ機会が少ないことに困っています。ほかには、離れ離れになった友だちが今どうしているか、心配な気持ちがあります。■今、やりたいこと
浪江の友だちと会って思いっきり遊びたいと思っています。また、一番やりたいことは、もっと「走る」ことをしたいと思っています。通学にどうしても時間がかかるので、もっと「練習時間があれば…」と思っています。■里帰りできた「陸上を続けたい」とことと「友だちと遊びたい」こと2つです。

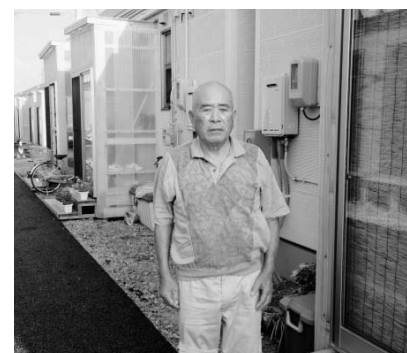
いました。岳温泉にいたときも同じように通学に時間がかかり、大変なことがありましたが自主練習は欠かさずに毎日走っていました。東和中学校は陸上部が盛んで、部員数も多いです。練習内容はとてもきびしいですけど、新しい仲間と一緒にがんばれることがとても楽しく感じています。これから大会に向けて毎日がんばりたいです。



金井 安雄さん(請戸)

取材者：市民公益活動パートナーズ
(特定非営利活動法人ピースふくしま) 中鉢
取材日：9月15日

生きがいになるものがほしい



▲北幹線第一仮設住宅前にて。ちょうど舗装工事が終わったばかりのところでした。

請戸に住んでいた金井さんは、震災後飯館の友人宅、宮城県巨理の息子さん宅、横浜の娘さん宅と移り、6月18日に北幹線第一仮設住宅に入居しました。現在は、奥さまと2人で生活しています。

3月11日の地震があったときは、病院や農協に行った後で、地震がおさまった後、一旦家に戻ると瓦が落ちていました。2度目の揺れが来て、危ないなと思ったので車で避難しました。6号線の如水のところにいると、後から来た人から請戸の部落が無くなっていると聞きました。請戸には津波は来ないからと言って残っていた方もいて、顔見知りや近所でも亡くなった方がいました。1回目の帰宅のときに見てきたのですが、畑をやっているいろいろな作物を作っていたり、シルバー人材で植木屋や家の解体の仕事などもやっていたり、その資材などもあったのですが、みんな流されてしまいました。仮設には6月16日の説明会のあと、すぐに入れたのはよかったです。仮設住宅もまだ直すところがあって、お風呂のお湯と水の調整のcockの調整が難しいので直してもらっています。心配なのは寒くなったときです。夜にふと目が覚めたときに将来のことも考えたりもします。気をもんでもしょうがないとは思っています。この仮設には請戸の人も多いため、集会所で集まって、懇談したり涼んだりしています。鮎とりをしたり、釣りをしたり、鮭がのぼつてくるのが楽しみだったり、夏は海水浴の監視員をやったり、いろいろ楽しみもあつたのですが、今は夢の夢になってしまいました。これからのことについては、請戸の360戸が1カ所にまとまって住めるようなものをつくってもらえたらと願っています。



鈴木 美穂さん(川添)

取材者：茨城大学大学院 川又
取材日：9月14日

町中のみんなが「お知り合い」

生後3カ月(当時)の次男を抱きしめて耐え抜いた地震。津波で義父(棚塩)が犠牲になった。現在、茨城県石岡市内の公営住宅に親子4人で暮らしている。

震災発生当日は、川添の実家で被災した。当時、実家には、私、次男(当時3カ月)と実母、祖母がいた。私は、地震の揺れで天井から落ちてきた照明器具が頭に当たってけがをしたが、他の3人は無事だった。

町内の歯科医院で助手として働いていた私は、夕方、仕事が終わると、町内で夕飯の買い物をして帰っていた。「子どもや夫も帰ってくる時間」そう思いながらも、つい買い物の時間が長くなってしまふ。「なんだ、パンゲの支度が？」必ず何人かに声をかけられ話し込んでしまう。そして、「おばちゃん、もう痛くないですか？」昼間来院した患



▲鈴木美穂さんと次男(現在6ヶ月)

者さんの姿を見つけては声をかける。買い物を終え帰宅するころには、すっかりあたりは暗くなっていた。「お母さんお腹すいた！」子どもたちが口をとんがらがせて、脚にしがみついてくる。そんな日常だった。

石岡市在住の姉をたよってこの地で生活を始めた。南相馬市内の会社に勤務する夫は、勤務先の業務再開により、南相馬市で单身生活を送っている。仕事が忙しいため、月に一度程度、子どもたちに会いにくるのがせいぜいだ。

見知らぬ土地で最初は戸惑うことも多かったが、9月に入って長女と長男が市内にある私立幼稚園に通い始めた。

避難生活を始めて半年、一時帰宅にも参加したが、地震で傷んだ我が家の周りには、私の背丈ほどになった雑草が生い茂っている。

生まれて以来、私たち家族はみんなこの町「なみえ」で育ってきた。いつかまたこの町に戻り、友だちや親戚、日ごろ気軽に声を掛け合ってきた人たちと、震災や原発事故による避難生活の日々について「あの時は苦労したよね…」と話せる日が来ることを、思い出に変わる日が来ることを信じている。そして、一日でも早く家族がそろって暮らせる「日常」が来ることを願い、しっかりと前を向いて子どもたちを育てていきたい。



泉田七海ちゃん(小2)・真美さん・利雄さん(両竹)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 風間・鍋嶋
取材日：9月12日

3月10日に戻って、いろいろなものを見てみたい

津波ですべて流されて何一つ持ち出せなかった泉田さん家族。数か所の避難所を経て、4月から家族6人で東京都足立区の団地に住んでいます。



▲『浪江カエル』を抱えた麻衣ちゃん、七海ちゃん、利雄さん(おじいちゃん)、真美さん(お母さん)

浪江にいたときには、お友だちとマリナーパークに行ったり、パーベキューをしたり、たくさん楽しいことがあったよ。今、通っている小学校は5クラスもあって、お友だちの名前を覚えるのが大変。浪江の小学校は1クラスだけだったから、みんな仲良しだったよ。

■七海ちゃんの話
地震のときは、お母さんと妹の麻衣といっしょに、車で逃げたの。車には、チョコレート1個しかなくて、お腹がぺこぺこだったよ。その日の夜は車の中で寝たの。車の中にあつたカエルのぬいぐるみを見ずと大事にしているの。だって、ほかには何も持ってなかったんだもの。もしできるなら、3月10日に戻って、いろいろなものを見てみたいなあ。海、カエル、おたまじゃくし、ザリガニ：一番に会いたいののは、猫のタロー。どうしているか、とっても心配。

■利雄さんの話
地震のときは、家内と津波に追われながら山に逃げました。避難所で息子といっしょになりましたが、孫たちは見当たりませんでした。知人の車を借りて、一晩中あちらこちらの避難所を探し回り、出会えたときは、もう言葉にならないほど嬉しかったです。

あと8回寝たら私の誕生日がくるのが、今一番の楽しみ。妹の麻衣は、電車やバスが好きなので、東京でも楽しそうだけど、東京にはカエルがないねと話しているの。
■真美さんの話
ここの住人の方からは、「大丈夫ですか。困ったことはありませんか。」と声をかけていただき、理解ある方に恵まれています。ただ、子どもたちは、飛び跳ねたり、自由に元気に遊びたい時期なのにできないのが、とてもかわいそうです。4月にここに来たときは、長女の学校のことがばかり気になり、次女の幼稚園は後回しになってしまい、同じ年代の子とも遊ばせる機会が持てないことが気がかりです。



▲明歩ちゃんが通う小学校の前で、左から渡部寛志さん・明理ちゃん・明歩ちゃん・直美さん



渡部 寛志さん・直美さん(酒田)

取材者：一般社団法人いなかパイプ 佐々倉
取材日：9月13日

「みかん」で福島と愛媛をつなぎたい

浪江町に農場を持ち小松菜・米・養鶏を育てる農家だった渡部夫妻は、現在、寛志さんが大学時代を過ごした愛媛県に家を借り、家族4人で暮らしている。農地も借りることができ、農家としての再出発も果たしている。

南相馬市小高区で生まれ育ちましたが、農場や生活圏が浪江町にあり、市場に野菜を出したり、浪江町の人たちに自分たちがつくったものを食べてもらっていました。そんな浪江町に住もうと住所を移して間もなく震災に遭いました。

愛媛に避難して地域の方によくしてもらい、家やみかん付きのみかん畑まで貸してもらったことができ、今年からみかんを出荷することができました。このみかんが福島と愛媛をつなげたいと思っています。東北のみかんをつくっている人はほとんどいない。福島の農民と競争することがない作物を送れば喜ばれるだろうし、自分たちとのつながりを保っていきけるだろうと思ってみかん畑を借りました。

これまで付き合っていた地域の人たちが、全国散りちりになっていますから、そういう人たちに届けられるようにしたいです。学校給食にでも使ってもらえたら、福島の子どもの口には入ります。そうやってできれば、全量福島に出荷したいと考えています。けれども、私も生活がかかっていますから、成り立つ仕組みを考えていきたいと思っています。また、そうすることで「自分がめげずに、農業やっているんだぞ」という主張にもなるかなと思います。他にも避難者で、農業を再開している人がいますから、その人たちと連携して、今後このような取り組みを展開していきたいと思っています。